

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 1 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25770263

研究課題名(和文)ローマ帝政後期における都市と文化環境の研究

研究課題名(英文)Cultural Transformations In the Eastern Cities of the Later Roman Empire

## 研究代表者

田中 創 (TANAKA, Hajime)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：50647906

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、キリスト教化が進行したローマ帝政後期の東地中海世界において発生した都市空間の変容やギリシア文化の変容の一側面を明らかにすることを目的として、以下の三点に関わる調査をした。第一に、伝統的な多神教の神殿が破壊される社会現象や、新興の天使崇拝のための聖域が帝国内に広まる過程を分析した。第二に、ギリシア弁論家リバニオスの残した著作を基に、当時の有力者層の人的・文化的ネットワークを再構成した。最後に、教会史の歴史叙述の目的や、歴史人物像の時代を超えた受容経緯についての考察を加えた。

研究成果の概要(英文)：This research explored cultural changes in the Greek cities, especially in Antioch the metropolis of Syria, in the later Roman Empire. In order to reveal the interactions between Christianity and Hellenistic culture, the researcher principally investigated the temple destruction by Christians and the propagation of angel-worship in Late Antiquity and revealed dynamics between imperial policies and local elites. Furthermore, the prosopographical research on Libanius' Letters made it possible to reevaluate the political relationship among imperial elites. Finally, the historiographical tradition was put into the context of religious polemics through the analysis of Theodoret's Church History.

研究分野：古代ローマ史

キーワード：リバニオス キリスト教 初期ビザンツ 宗教史 歴史叙述 神殿 ギリシア修辞学 天使

### 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、ローマ帝国下の東地中海世界、とりわけその中の巨大都市であったアンティオキア市とコンスタンティノポリス市に着目し、この二市を舞台に活躍した4世紀のソフィスト(ギリシア修辞学の教師)リバニオスに関する研究を進めてきた。この人物を研究対象としたのは、彼が修辞学という、ヘレニズム文化の中心的な文化素養の教育者という立場にあったことに加えて、ローマ帝国の有力者たちと接触し、政治的発言もしていたことから、4世紀東地中海世界の文化的・政治的環境を調べる上で恰好の対象だったからである。他方で、彼についての研究は欧米圏でもそれほど十分ではなく、しかもその大半は、20世紀後半にピーター・ブラウンによって先鞭をつけられた古代末期研究の膨大な成果が世に出される以前に発表されたものであっただけに、研究を新たな知見から見直す余地が十分残されていた。

その一方で、国内的には弓削達、後藤篤子、足立弘明などの研究者によって、帝政後期に関する研究は着実に蓄積されてきてはいたものの、帝政後期(4-6世紀)に関して残された古代史料の数は、それまでの400年間の史料の総数と比べてもその何倍にも及び、研究未開拓の部分はもちろんのこと、紹介されてきたものでさえ十分ではなかった。

### 2. 研究の目的

上記のような研究状況に鑑み、本研究では世界的にも十分に研究されているとは言えないリバニオスの1,500通強にのぼる書簡史料の分析を進め、人物同定や著作の成立年代などの基礎的な情報を再整理し、従来の研究ではともすると異教対キリスト教というステレオタイプな図式で捉えられがちであったリバニオスの交友関係を解釈しなおすことを一つの目的とした。これと同時に、キリスト教化が進むローマ帝国下において、伝統的なギリシア文化の担い手たる知識人層・地方エリート層が果たした役割について新たな像を描き出すことが期待された。

また、書簡以外のリバニオスの著作や、同時代のキリスト教作家の作品から知られるアンティオキアの都市生活、宗教史・社会的側面を史料解釈に加えることで、単にエリート層の政治的動向のみならず、帝政後期の東地中海世界に生きた人々の心性や宗教実践など社会的側面も明らかにすることを試みた。リバニオスの著作からは、エジプト、メソポタミア、パレスティナ、小アジアなどの広域にわたって展開した人的・文化的交流についての深い洞察を得ることが可能であり、都市生活内部はもとより地中海世界全体で展開された文化潮流などについて貴重な知見が得られることが見込まれたからである。加えて本研究では、リバニオスが主として活躍したシリアのアンティオキアや同市と関連の深い小アジア地方などの周

辺域にまつわる情報を、聖人伝や教会史、年代記などのキリスト教著作やローマ法史料などからも抽出することを試みた。これは、ローマ帝国政府によってキリスト教が公認、国家宗教化される中で、社会の様相、文化環境、政治活動などがどのような変化を遂げたのかという点を中心に、この時期の社会変化をより多面的な側面から抽出することを目指すものである。

第三に、研究を進める中でより重要性を帯びるようになった研究対象として、歴史叙述の問題がある。分析を進める中で文献史料を主として扱わなければならないという研究の特徴から、扱う史料の性格を検証することが必要とされたが、存外はこの方面に関する研究蓄積が世界的に見ても乏しく、とくにシリア地方で活躍した教会史家テオドレトスに関するそれについては、総合的な見直しが必要であることが研究の早い段階から痛感された。そのため、分析対象の中心をなす史料について、その歴史叙述の筆致の特徴や、後代に史料が編纂されたときの編纂者の意図などを考察することが目指されることになった。

### 3. 研究の方法

全体としては、その年度ごとに対象となる史料、分析目的を絞り込み、段階的に上記3点の研究目的を達成していくことを目指した。

(1)2013年度は主に、リバニオス『書簡集』史料中に現れる人物情報の整理、ローマ帝政後期都市に関連する資料のリストアップと収集に従事した。に関しては、*Prosopography of the Later Roman Empire*, vol. 1 (Cambridge, 1971)『後期ローマ帝国のプロソポグラフィ』第1巻を筆頭に、関連する研究書や注釈書を利用しながら、人物同定について一次史料を改めて整理しなおし、従来の研究手法の問題点を抽出した。この成果はその後の人物分析の基礎になっており、例えば、2017年度末の書評論文には大いに活用された。また、に関しては、国内大学図書館に不足している文献資料や事典類の収集に努めたほか、バイエルン州立図書館での文献調査も実施した。これに付随して、ウィーン美術史美術館やパピルス博物館、ミュンヘン貨幣博物館などの公共施設を訪ね、帝政後期の都市に関連する考古学資料に関する情報を収集した。

(2)2014年度は、教会史の作家テオドレトスの残した『教会史』の内容分析と執筆時の歴史的背景の解明、ローマ帝政後期都市における聖域空間、とりわけ神殿の利用法変化とその社会的背景の分析、の二点に主として従事した。

テオドレトスの『教会史』は、本研究課題の主たる分析対象である都市アンティオキアについての重要な情報を数多く提供する史料であることから2013年度の段階からそ

の重要性に着目し、分析に取り組んだ。関連して、帝政後期における教会間での人的・知的交流、教会政治と帝国政治の連動などをカルケドン公会議議事録、同時代の複数の教会史史料を用いて研究した。

(3) 2015年度は、帝政後期の人々の心性や宗教慣行についてのさらなる分析が必要と目されたことから、ローマ帝政後期都市における聖域空間、とりわけキリスト教化したローマ帝国における天使崇拜の受容・普及過程およびその社会的背景の分析、ギリシア弁論家リバニオスの残した書簡史料・弁論史料のテキスト分析という方法論を取った。

(4) 加えて、2015年度から2016年度にかけては、リバニオスの書簡史料をより客観的に評価するための材料として、「背教者」として知られた皇帝ユリアヌスの書簡集に着目した。この史料は様々な写本によって現代まで伝承されてきているものの、近代以降の研究では、これらの史料から浮かび上がる歴史的実体としてのユリアヌスの思想・政策ばかりが着目されてきた。本研究ではこれに対し、歴史的人物像の伝承という面に着目し、写本がどのような観点から資料を収集しているかという側面に着目した。

#### 4. 研究成果

2013~4年度のテオドレトス『教会史』の分析により、4~5世紀の東地中海世界におけるキリスト教会が、伝統的な都市間競争を背景に行っていた教会政治の一側面を明らかにした。また、このような政治的背景のもとに行われた、歴史叙述と記憶の操作についても考察を加えた。その成果はまず2014年にギリシアで開かれた研究会での口頭報告となり、そのときの批評も参考にしながら、2015年度に『Orthodox Emperors and Propaganda in Theodoret's Ecclesiastical History』という論考に結実している。著者による主観的な叙述が多く、「史実」を抽出するための歴史史料としての価値が低いと見なされ、研究者の間であまり利用されてこなかった同史料に対し、本研究では著者の置かれていた教会政治の文脈の中で『教会史』が書かれたという仮説を史筆の分析を通して提示した。それは同時に、ローマ帝政後期における歴史叙述活動がいかなる社会的文脈、目的で行われていたかを問い直すものとなった。

また、2014~5年度にかけては、本研究の主たる分析対象であるリバニオスの伝える情報に加え、先述のテオドレトスをはじめとする教会史料、法史料など関連古代史料を博捜し、4世紀における神殿施設の利用状況と都市景観の変化の軌跡を追った。同時に、神殿施設の機能転用がもたらされることとなった帝国政治のメカニズムを、中央政府、地方住民、地方統治にあたる官僚たちの三者関係をもとにして分析した。その成果の一部として、弁論史料から浮かび上がる神殿破壊の

文脈に関する論稿『Libanius' Pro Templis (Or. XXX): Another Aspect of Ruler-Subject Relationship』を2015年に発表し、限定的に公開されたにすぎないとされてきた弁論史料が帝国政府に対する積極的な発言であった可能性を問うた。同時にこの論稿はキリスト教対異教という伝統的な認識枠組みを捉えなおし、帝政後期での宗教面での実践を再考することも射程に置いたものである。

また、より広範な帝国全体での神殿破壊に関する研究成果については、まず2014年6月の西洋史学会シンポジウムで調査結果が一部発表された。研究代表者はこのシンポジウムでの討論で古代ギリシアからの通時的な聖域空間の変容に着目する契機を得、その成果は2017年に勉誠出版から出版された『古代地中海の聖域と社会』にまとめた。そこに収められた論考では、神殿施設破壊という帝政後期の現象に関連して、当時の人々の心性、帝国政府側の宗教施策の変動、被支配民の動向、統治にあたる行政官僚の役割など多角的な視野を取り入れ、キリスト教化という漠たる言葉で説明されがちな古代末期の社会変化の実相を描き出すことに成功した。

また中央政府と地方社会との関連という側面に関しては、2014年に『Some 'Asian' Aspects in the History of the Later Roman Empire』という口頭報告を行い、貴族制の捉え方について、中国史とローマ史において類似して見られる中央と地方の関係性を素描した。

聖域空間と心性に関する研究をさらに深めるため、2015年度にはそれまでほとんど研究されてこなかった天使の名を冠する建築物に着目して、4-6世紀にかけての古典文献、教父著作、碑文などから確認される事例を収集した。そこからは、小アジアでのユダヤ教徒と「多神教」との接触が天使崇拜の交流をもたらしたという通説を批判し、むしろ、コンスタンティノポリスなど地中海の大都市で5世紀以降広範に確認される現象であること、そして、6世紀のユスティニアヌス帝の治世に象徴されるように、ローマ皇帝の支援が大きな影響をもたらした可能性を示唆した。研究成果は『St. Nicholas and Religious Landscape of Lycia: Worship of Angels in the Age of Justinian』という報告で発表された。

最後に2016年度には、「背教者」ユリアヌス『皇帝書簡と伝承』で、4世紀のローマ皇帝ユリアヌスの名のもとに残された書簡史料の分析成果をもとに、受容史の観点から同帝の歴史人物像を議論した。これまでの研究ではユリアヌスの歴史の実像に主として関心が注がれてきたのに対し、改めて写本の伝承過程に着目し、ユリアヌスの人物像が古代末期にどのような変容を遂げていったのか、そしてユリアヌスのものとされる書簡の真贋をどのようにして評価できるかを再検討した。とくに個々の写本に収録されてい

る書簡の配列に着目したことで、中世以降のような観点から史料の収集・編纂がなされていたかを提示することができた。さらに、「伝承される書簡と人物イメージ ユリアヌスとリバニオスの書簡集を例に」と題した報告では、2013年度～2015年度に進めたギリシア弁論家リバニオスの残した書簡史料・弁論史料のテキストにも、ユリアヌス書簡と同様の分析方法を適用し、比較することを試みた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

田中創、「背教者」ユリアヌス 皇帝書簡と伝承、『歴史学研究』、951号、2016年11月、12-27頁、査読あり。

Hajime TANAKA, 'Libanius' *Pro Templis* (Or. XXX): Another Aspect of Ruler-Subject Relationship', *KODAI*, 16, pp.161-172, 2015年、査読あり。

田中創、(書評)粟辻悠 古代ローマ帝政後期における弁論人(一)～(五・完)。同ローマ帝政後期の弁論人における「年功」の意義、『法制史研究』、66号、2017年3月、439-444頁、査読なし。

[学会発表](計6件)

田中創、伝承される書簡と人物イメージ ユリアヌスとリバニオスの書簡集を例に、古代ギリシア文化研究所 2016年度総会・研究会、向ヶ岡ファカルティハウス・セミナールーム(東京都文京区)、2016年11月5日。

Hajime TANAKA, St. Nicholas and Religious Landscape of Lycia: Worship of Angels in the Age of Justinian, The Asia Minor Workshop: Understanding the Process of Hellenization in Asia Minor, 京都大学吉田キャンパス総合研究棟2号館文学研究科第10演習室(京都府・京都市)、2016年3月21日。

田中創、テオドレトス『教会史』とテオドシウス帝、古代・東方キリスト教研究会第20回報告、東京大学駒場キャンパス18号館(東京都目黒区)、2014年12月7日。

田中創、ローマ帝政後期の神殿利用 州民と官吏の相互作用、第64回日本西洋史学会大会シンポジウムA「古代地中海世界における聖域と社会」、立教大学池袋キャンパス15号館(東京都豊島区)、2014年6月1日。

Hajime TANAKA, Theodosius' Religious Policy in the Ecclesiastical History of

Theodoretus, The Third Euro-Japanese Colloquium of the Ancient Mediterranean World: "Myths, Sanctuaries and Historiography", British Schools at Athens (アテネ、ギリシア共和国)、2014年4月26日。

Hajime TANAKA, Another "Asian" Aspect in the History of the Later Roman Empire, Kyoto Lecture & Workshop of Ancient History "New Approaches to the Later Roman Empire", 京都大学吉田キャンパス総合研究2号館(京都府京都市)、2014年3月8日。

[図書](計4件)

浦野聡、上野慎也、師尾晶子、Ian Rutherford、竹尾美里、中川亜希、藤井崇、田中創、奈良澤由美、『古代地中海の聖域と社会』、勉誠出版、2017年、255-295頁。

Takashi MINAMIKAWA, Mischa MEIER, J. WEISWEILER, Hajime TANAKA et al. (計12名、筆者5番目)、*New Approaches to the Later Roman Empire*, Kyoto University, 2015年、53-57頁、85-102頁。

石井洋二郎、加藤俊英、田中創ほか(計18名、筆者5番目)、『高校生のための東大授業ライブ：学問への招待』、東京大学出版会、2015年、30-43頁。

田中創、『リバニオス 書簡集 1』、京都大学学術出版会、669頁、2013年。

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

田中 創 (TANAKA, Hajime)

東京大学大学院・総合文化研究科・准教授  
研究者番号：50647906